

第 20 回タナトロジー研究会
人間の死生とスピリチュアルケア

竹之内 裕文

2004.10.19

岡部医院（名取）

序

A 出合い

- ・ 疑問 そんなに整然と分かつたものか。
 なかでも、精神的 (mental) とスピリチュアル (spiritual)
 の違い。
- ・ 一例

英語	Mental	Spiritual
日本語 (ホスピス・緩和ケア)	精神的	スピリチュアル (霊的・実存的)
独語	Seele (seelisch, geistig)	Geist (geistig)
日本語 (思想史・哲学史)	霊的・魂の	精神的

B 生じた問い「スピリチュアルケアとはいったい何なのか？」

- ・ 精神的な (mental) 次元とスピリチュアルな (spiritual) 次元との関係
 - ・ 医学系と人文系とのあいだの反転現象
 - ・ スピリチュアルケアが「なんであるのか」が曖昧である限り、「どうあるべきか」(具体的なケアの実践) も基本的に不明。
- (例) 「霊的・実存的苦痛に対するケア」として挙げられているものの中にも、「特定の状況にかぎらない基本的なケアと考えられるもの」が数多く混入している¹。
- ・ スピリチュアルケアのいわば「基礎論」を構築するという課題

¹森田達也、鄭陽、井上聡、千原明「終末期がん患者の霊的・実存的苦痛に対するケア 系統的レビューにもとづく統合化」、『緩和医療学』(vol.3,no.4) 所収、2001 年。

探求の出発点 = シシリー・ソンドースの実践

A なぜソンドースに遡るのか

- ・ 今日の「スピリチュアルケア」: 明確な定義の欠落 & 問題の焦点の拡散
- ・ その背景に潜む事態: ソンドース以降の実践における「スピリチュアルケア」の非宗教化

B ソンドースの取り組み

(1) ターミナルケアの前提条件としての疼痛コントロール

- ・ 癌の激痛そのもの(しばしば嘔吐や呼吸困難を伴う)を鎮静すること。
- ・ 緩和医療全体のその後の飛躍的な発展。

(2) 「痛みの感じ方」に見られる心身の相互連関への注目

- ・ 「心理的な因子(うつ状態、不安、孤独、退屈など)」が「痛みの感じ方」を大きく左右する²。
- ・ ある女性患者の告白
- ・ 心身の相関 & 社会的な契機
- ・ さらに別種の問い = 「スピリチュアルな痛み」(ソンドース)

C ソンドースの実践の継承

- ・ 「トータルペイン」への対応
- ・ 近年の「実証研究」(注1)による裏づけ: 「終末期がん患者の多くが身体的、精神的、社会的苦痛」に加えて、スピリチュアルな痛み、つまり「生きる意味や希望の喪失といったより根源的な苦悩」を抱えている。
- ・ 「スピリチュアルな痛み」 ~ 「生きる意味」の自明性の喪失

D ソンドースからの乖離

- ・ ソンドースにおける実践の支えとしての「宗教」
- ・ 欧米社会における世俗化の進行
- ・ ホスピスケアに関わる日本の事情

E 問題の所在

- ・ 「スピリチュアルな問題」は、医療的な枠組みに収まらない
- ・ 人間存在の根本制約としての「死」
- ・ 死(生)の「事実」とその「意味」との関係
- ・ まとめ

² Cicely Saunders and Mary Baines, *Living with Dying, The Management of Terminal Disease*, Oxford Uni. Press, 1989.(『死に向かって生きる 末期癌患者のケア・プログラム』、武田文和訳、医学書院、1990年。)

「人はいずれ必ず死ぬ」という事実

A 近代社会における「死」の位置

- ・ 私たちの社会を席卷する「もっと、もっと」という欲望
- ・ その中でも、もっとも根強い願望 = 「もっと長生きしたい」
- ・ 近代科学技術による成就 & 欲望の増幅
- ・ 「死」 = 克服、駆逐すべき対象
- ・ 「死」 = 「敗北」 「不死」 = 「勝利」
- ・ 「長寿」, 「不死」に対する根強い願望（古今東西の「不死」譚）

B スウィフトの思考実験

- ・ 「思考実験」
- ・ ガリヴァー船長の当初の「期待」
- ・ 「期待」の前提
- ・ ラグナグ人の意外な反応 & 「不死人間」の実情
- ・ 思考実験の結果
「不死」 「悲惨」から「幸福」への転化
「死」 = 欲望の歯止め 欲望に駆り立てられた人間を食い尽くすまで
増殖

C 人類の古来の智慧

- ・ 古代ギリシア人における「死すべきもの」としての人間
- ・ ユダヤ・キリスト教の伝統
- ・ 仏教における「四苦」の思想

D 近代的な死生観の倒錯

- ・ 「より以上の生 Mehr-Leben」の飽くなき追求 & 「生以上のもの Mehr-als-Leben」の隠蔽
- ・ 「ああ、もう一段下まで逃げられたらいいのだが！」
- ・ 終末期患者が直面する二種の精神的苦悩
誤解や曲解に基づく「恐れ」
「死」 (= 人間の根本条件) の「不安」

E 死生の「事実」

人間たる限り、各人が不可避に引き受けねばならない課題

- ・ 人類の 進歩 に関わりなく（パスカル）
- ・ 近代の異常さ
- ・ 普遍の事実としての「死」
- ・ 受身の死生

死生の「意味」 死の人称性を手がかりにして

A 人間的な生の根本事実としての「実存」

- ・ 可能性の不断の選択
- ・ 選択の仕方
- ・ 人間的な生の特有なあり方
- ・ 「根本事実 Grundtatsache」(ジンメル) 事実性 Faktizität (ハイデガー)

B 二つの「事実」概念

「人はいずれ必ず死ぬ」という「事実 Tatsache」(第二節で論及)
人間的な生の根本事実

C 死生の「意味」 死の人称性をめぐって

- ・ ごく平凡な、ありきたりの「事実」という想定 第三人称的な死を前提
- ・ 「第一人称的な死」ならばどうか？

D 「私の死」に関わる根源的な痛みはいかに癒されるのか

- ・ 「第一人称的な死」の特権性
- ・ 「私の死」を超えて
- ・ 「第二人称的な死」

結語 共に死生に預かるものとして

- ・ 死生の「事実」&「意味」と「宗教」
- ・ わが国におけるスピリチュアルケアの「非宗教化」
- ・ 「宗教」という概念を精査するという課題
- ・ シュライエルマッハーの「神秘主義的汎神論」(ディルタイ)
- ・ 宮沢賢治における「生ける宗教」の探求
- ・ まとめ